

【 論 文 】

# 「普通にかわいい」考

井 本 亮

要 旨

近年、「普通にかわいい、普通においしい」のような、副詞的成分「普通に」が被修飾成分の高い程度を表す用法が指摘されている。これについて「若年層を中心とする話者の『普通』に対する価値観の変化を反映するもの」という見方がある。本稿はこの用法に対して、「普通」の語彙的意味の変化によるものではないこと、標準値よりも低い程度が前提として導入されるという文脈的条件および副詞的修飾関係という構文的性質によって複合的にもたらされる現象であることを主張する。本稿の主張はひとつの語彙の用法を分析するだけでなく、程度副詞における「文脈敏感性」という観点を導入するとともに程度性/注釈性という叙述内容的側面/叙法的側面の交渉やスケール構造における段階的属性の程度修飾といった副詞的構文論の論点を惹起するものである。

キーワード：「普通に」、程度副詞、注釈副詞、スケール構造、文脈

## 1. はじめに：問題の所在

先日、日本語についてのNHKのテレビ番組において、副詞的成分の「普通に」が高い程度を表すという新しい用法が指摘され、若年層に広がる「普通」の価値観の変化に起因する現象だと位置づけられた。本稿はこのような指摘に対して、「普通に」が高い程度を表すように解釈されるのは標準の程度よりも低い程度の文脈が前提とされるという文脈的要因および副詞的修飾という構文的要因によるものであること、「普通」の語彙的意味の変化、社会的価値観の変化の反映と考えるのは早計であることを主張する。同時に副詞的成分の語彙的な新用法についての分析だけでなく、副詞的成分が持つ「文脈敏感性」という概念を提示し、そのほかの程度副詞・注釈副詞への援用を示唆する。

本稿の構成は以下の通りである。まず次の2節で問題の所在となる番組の内容を確認する。3節では「普通に」の修飾関係の多様性を確認し、この現象の構文的・文脈的特徴を指摘する。そして4節ではこの現象についての本稿のアンケート調査の結果を報告する。5節ではスケール構造と属性の標準値の観点から調査結果を分析し、「普通に」が高い程度を表すと解釈されるメカニズムを考察する。6節では本稿の議論の課題と今後の方向性について述べる<sup>1)</sup>。

<sup>1)</sup> 本稿では、いわゆる副詞的（連用）修飾に関わる統語的要素のうち、修飾する成分を「副詞的成分」、修飾される成分を「被修飾成分」と呼ぶ。また、修飾される意味的要素を「修飾対象」と呼ぶ。本稿で修飾対象となるのは情態概念であるサマと程度概念のスケールである。副詞的成分と被修飾成分によって構成される構文関係を「副詞的修飾関係」と呼び、副詞的成分による被修飾成分の修飾対象への意味的操作を「修飾」と

## 2. 問題の所在：「普通にかawaii」の高精度用法

本節では、問題の所在を確認する足がかりとしてNHK総合のテレビ番組『みんなでニホンGO!』（2010年4月15日放送）の内容を紹介する。あらかじめ付言しておけば、本稿の目的は特定のテレビ番組について批評することではない。「普通に」の副詞的修飾関係を検討する際の問題の所在を確認するうえで資料として都合がよいためであり、他意はない。とはいえ、NHKの番組として放送されたことの影響力を考えると、その内容について専門的な見地から検討を加えておくことは無益ではないと思われる<sup>2)</sup>。

当番組は昨今の気になる日本語のいくつかをテーマとして取り上げるバラエティ番組である。「普通に」は「フツーには普通?」と題された約15分のコーナーで取り上げられた。番組は内容の中心となるVTR部分と一般市民・タレント・コメンテータによって構成されるスタジオ収録部分からなる。なお、コメンテータには日本語学・言語学の専門家はいない。

番組内容は概略、以下の通りである。①「普通にすばらしいアルバム」という雑誌記事のタイトルに違和感を覚える辞書編集者が登場する。彼は「普通にすばらしい」というのが音楽のアルバムの評価としてどのような意味を表すのか首をかしげる。②そこで、街頭アンケートを実施してみると、通行人から「あの子、フツーにかawaiiよね」「フツーにこれ食べたくない?」「フツーにかawaii」「フツーに好き」といった例が挙げられる。③そこで、上段に「チョーかawaiiよね」、中央に「かawaiiよね」、下段に“ビミョー”という目安<sup>3)</sup>を貼った縦型長方形のフリップを提示し、「フツーにかawaii」がどこに位置するかを尋ねたところ、若年層と見られる通行人からは「かawaiiよね」より上位「好印象」「みんなが認めるカワイイ」という高い評価を持つと回答した。一方、年配の通行人は「かawaiiより下」「ビミョーより下」と回答した。④以上から、番組は「フツーの価値が急上昇中」と結論づける。スタジオにいる一般参加者、コメンテータ陣の「フツーにかawaii」と言われたときの評価は「うれしい：60%、うれしくない：40%」であった。⑤次のVTRでは舌津智之氏<sup>4)</sup>の分析が紹介される。舌津氏によれば、流行歌における「普通」という言葉は80年代半ばから評価が下がったのち、21世紀に入って評価が急上昇したと指摘する。つまり、1970年代後半より、女性の社会進出・ライフスタイルの多様化によって、主婦の立場が相対化され、80年代末のバブル期～90年代においては「普通≒つまらない」という評価が続いたものの、その後21世紀に入り、平成不況の影響によって、普通でいることが難しい状況が生じ、肯定的評価のニュ

---

呼ぶ。本稿で取り上げる副詞的修飾関係は主に情態概念および程度概念に関わる修飾関係である。また、意味的概念や修飾対象の意味範疇を「普通」のように角括弧で表記して語・構文成分などと区別する。関連する議論については井本（2009）を参照。

<sup>2)</sup> たとえば北原（2004, 2005, 2007）による『問題な日本語』『続弾!問題な日本語』『問題な日本語その3』などは現職教員や一般市民の疑問に対して専門家の見地から検討・解説を加えた好例といえるだろう。

<sup>3)</sup> ここでの「チョー」は非常の程度副詞「超」、「ビミョー」は「かわいくない」の婉曲的表現である。

<sup>4)</sup> 舌津智之氏のJ-GLOBAL記載事項（<http://jglobal.jst.go.jp/public/20090422/200901056002450783>, 最終アクセス2010年12月20日）によると、氏の研究分野はヨーロッパ語系文学（研究分野キーワードはモダニズム・アメリカ文学・ジェンダー・セクシャリティ・大衆文学）とある。

アンスを帯びるようになる。そして、この10年における流行歌の歌詞の流行語になっていると舌津氏は指摘する。⑥ これに対してスタジオからは「格差社会が普通の価値の上昇をもたらした（経済アナリスト・森永卓朗氏）」、「外に指標を持って不安を抱えている人が増えているのは確か（精神科医・泉谷閑示氏）」といったコメントが挙げられた。

当番組において明確な結論が提示されたわけではないが、「普通にかawaii」が高い程度を表わす（「かawaiiよね」よりも「チョーかawaiiよね」に近い）という用法を現代社会における「普通」の価値観の変化が語彙の用法に反映されたものと位置づける趣旨だと理解できよう。繰り返しになるが、本稿はこの番組の放送内容に対する批評するものではなく、十分に検討されていない文法論的側面からの検討を加えようとするものである。ここから提起される論点をまとめれば次のようになる。

- (1) 「普通に」に高い程度を表す用法があるか。
- (2) それは「普通」の語彙の変化によるものか。

次節では「普通に」が副詞的成分としてどのような修飾関係を構成するかを確認する。

### 3. 「普通に」の修飾関係

「普通」とは辞書の定義では「他の同種のものにくらべて特に変わった点がないこと。特別でなく、ありふれていること」を表すとされる<sup>5)</sup>。ここではまず、「普通に」がどの程度を表すかという問題の前に、「普通に」がいくつかの異なる修飾関係を構成することを確認しておく<sup>6)</sup>。以下に見るように、微細に見ればそれぞれの副詞的修飾関係は別個の意味解釈を持つ。ただし、「普通に」が表すサマは語彙の意味であるが、具体的な情態概念というよりも多分に相対性を持つ概念である。

#### 3.1. 動作様態副詞的用法

第一に、動詞が表すウゴキのサマを修飾限定する用法がある。

- (3) 映画だからといって演技をせずに、普通に話してください。
- (4) 福島から米沢まで、普通に走れば45分で到着する。
- (5) 空襲の日も、先生は普通に授業をした。

これらの例では「話し方、（自動車の）走らせ方、授業のしかた」など、動詞が含意するウゴキのサマを修飾限定し、それが「普通」であることを表している。そのサマは実際には文脈や言語外

<sup>5)</sup> 『明鏡国語辞典（初版）』（2002年、大修館書店）による。

<sup>6)</sup> そもそも「普通に」という成分が統語的・品詞的のどのように位置づけられるべきかについては本稿は立ち入らない。現在の情態副詞研究では副詞的修飾関係の構成成分になっていけば、それが形容詞であれ後置詞句であれ、ひとまずその意味・用法を記述するというアプローチをとり、本稿もそれに従う。

現実の知識による。つまり、何が「普通」であるかは当該動作や行為に対する社会通念に依存する。ただし、後述するような程度副詞的用法におけるスケール上の特定の値とは異なる情態性を持つサマであろうと考えられる。「普通」というサマのあり方は相対的であるが、使用される文脈で「普通」と考えられていることに変わりはない。

このような言語外現実の知識に依存する相対的なサマという性質は次のような周辺の事例と考えられる例をうむ。

(6) ナイフを向けられても春夫は普通に携帯をいじっていた。

(7) 夏子は床に落ちたクッキーを普通に食べた。

ここで修飾限定する意味概念「普通」は社会通念上の普通のあり方に加えて「それが動作主にとっては「普通」であると考えられるサマ」と解釈される。つまり、「普通」の判断を行うのは話者ではなく動作主である（と話者は捉えている）。このような修飾関係は仁田（2002）の「主体状態の副詞」における「主体の心的状態・主体の態度的ありよう」を表す副詞的成分に相当すると考えられる。

(8) 春夫はしぶしぶ携帯を床に置いた。

(9) 夏子は素直にクッキーをごみ箱に捨てた。

(10) 冬美はおそるおそるその箱を開けてみた。

上例の「しぶしぶ、素直に、おそるおそる」はウゴキのサマとして表出している動作主の心的状態を表しているとして、動作様態副詞的用法に位置づけられる。また、「普通」と感じているのが動作主である点で次節の注釈副詞とは異なる。

### 3.2. 注釈副詞的用法

注釈副詞は被修飾成分が表すサマを修飾限定するのではなく、表されるコトガラ（叙述内容）に対する話者の評価・注釈を表す（工藤 1983, 2000 など）。その点で、情態修飾成分のように命題内で修飾関係を構成するのではなく、叙述内容の外側で叙法を規定する叙法副詞（モダリティに関わる副詞）に近づいている。

(11) 「お願いします」って友達にも普通に言うよね。

(12) ひとりカラオケも普通に行くよね。

(13) 教室で携帯の充電、普通にするよね。

上例では、「『お願いします』と友達に言う」というコトガラに対して、話者が「普通」である、つまり、特に珍しくないありふれたことであるという評価・注釈をつけているという解釈であり、

言い方がありふれているということではない<sup>7)</sup>。このような修飾関係は次例における「珍しく、あいにく、意外と」などと同様の用法といえる。

- (14) 今日の冬美は珍しく饒舌だ。
- (15) あいにく、合コンがキャンセルになった。
- (16) 週末の夜でも店内は意外と空いていた。

コトガラへの注釈はある種のスケール概念上の値指定と見ることも不可能ではない(たとえば「春夫のしたことは完全に間違っている」など。北原 2009 参照)。しかし、仮にそうだとすると、注釈副詞的用法における「普通」と次節で述べる程度副詞的用法とは区別して扱うべきである。(14)を例にとれば、「珍しく饒舌だ」が表しているのは「饒舌に話すそのサマが珍しい」ということではなく、饒舌であることそのものが珍しいということである。つまり「饒舌だ」という叙述内容そのもののサマや程度を特定するものではないので、この用法であるかぎり「どれくらい饒舌か」という論点とは関わらない。

### 3.3. 程度副詞的用法

程度副詞による修飾(程度修飾)あるいは程度性の実現は意味範疇としてのサマを修飾限定する情態修飾関係とはやや異なる。段階性(gradability)を持つ属性(property, サマ)はその属性の程度をスケール(scale)として持っており、その値が定まることによって初めて実現する。無標の段階的属性の程度はスケールの文脈的あるいは語彙的な標準値を取ることによって定まる(岩本 2008, 井本 2008b 参照, 5 節で詳述)。そして、程度修飾とはスケールにおいて段階的属性の程度値を程度副詞によって有標的に指し示すことと理解できる。

さて、「普通に」はそのほかの一般的な程度副詞と同様、段階的属性の程度を有標的に定めることができる<sup>8)</sup>。

- (17) 学食のラーメン, |すごく/とても/普通に/まあまあ/そこそこ| おいしいよ。
- (18) 春夫のカノジョ, |すごく/とても/普通に/まあまあ/そこそこ| かわいいよ。
- (19) 動物園って, |すごく/とても/普通に/まあまあ/そこそこ| 楽しいよ。

上例では「おいしい・かわいい・楽しい」のそれぞれが含意するスケールの属性の程度値が無標の標準値ではなく、「すごく/とても/普通に/まあまあ/そこそこ」が定める値であることが表される。このとき、「普通に」はスケールの中間点 = 標準値よりもやや高い程度であるような内省が確かにある。

以下、「普通に」の程度副詞用法に見られる特徴をいくつか観察する。まず、段階的属性にはスケール

<sup>7)</sup> ここでの例においてとりたてて詞「も」との親和性、および、文脈感性がこの用法にも認められるが、ここでは深入りしないことにする。文脈感性については 3.4 節で後述。

<sup>8)</sup> 日本語の程度副詞の全体像については工藤 (1983)、仁田 (2002) などを参照。

ルに対する正負の方向性があるが、純粹程度副詞は負の方向性に修飾することができない（仁田 2002, 北原 2009）。

- (20) ?? お酒を非常に飲んだ。  
 (21) お酒を非常に {たくさん/多量に} 飲んだ。  
 (22) \* お酒を非常に {少し/少量} 飲んだ。

（北原 2009）

北原はこのことをスケール上の負の方向に推移する属性を程度副詞によって増幅させても標準値の程度が成立する保証がないためであると説明している。「普通に」も[おいしさ][かっこよさ][楽しさ]などのスケールから負の方向性を持つ段階的属性を表す形容詞とは共起しにくい（共起した際に程度副詞用法とは解釈されにくい）。こういった特徴は一般的な程度副詞の用法に見られるものといえる。

- (23) ? 学食のラーメン, 普通にまずいよ。  
 (24) ? 春夫のカノジョ, 普通にダサいよ。  
 (25) ? 動物園って, 普通につままないよ。

上例において「普通に」が共起した場合、その解釈が程度修飾つまり[おいしさ・かっこよさ・楽しさ]がどれくらいであるかを表すのではなく、「学食のラーメンがまずいのは普通のことだ」のような、注釈副詞的に解釈されることに注意されたい。

一方で、「普通に」には程度副詞、高い程度を表しているという分析とは相容れない性質も見られる。第一に、「普通に」は高い程度を表すホド句と共起しにくい。

- (26) 学食のラーメンは普通においしい。  
 (27) 学食のラーメンはおかわりしたくなるほど {すごく/とても? 普通に? やや} おいしい。  
 (28) 春夫のカノジョは普通にかわいい  
 (29) 春夫のカノジョは二度見してしまうほど {すごく/とても? 普通に? やや} かわいい。

ホド句は具体的なコトガラを補部にとって句全体で高い程度を表す量・程度副詞として機能する。より正確に言えば、ホド句が現れることで高い程度を表す構文が立ち上がる（井本 2000, 2004）。このとき、ホド句は高い程度を表す程度副詞「すごく・とても」などと共起することができるが、「普通に」や低い程度を表す「やや」とはなじまない。このことは「普通に」が本義として高い程度を

表すわけではないことを示唆している<sup>9),10)</sup>。

第二に、程度副詞は段階的属性を含意する状態変化動詞の程度を直接修飾することができるが、「普通に」は状態変化動詞の程度修飾は困難である。

- (30) 今日のバイト、すごく疲れたね。  
 (31) 冬美、ずいぶん瘦せたね。  
 (32) 夏子、休みに入ってちょっと太ったね。  
 (33) 留学生、だいぶ増えたね。  
 (34) 今日のバイト、普通に疲れたね。 [ ? 程度 / 注釈 ]  
 (35) 冬美、普通に瘦せたね。 [ ?? 程度 / ?? 動作様態 / 注釈 ]  
 (36) 夏子、休みに入って普通に太ったね。 [ ?? 程度 / ?? 動作様態 / 注釈 ]  
 (37) 留学生、普通に増えたね。 [ ?? 程度 / ? 結果 / 注釈 ]

注釈副詞の用法は現表事態に対する話者の評価を表すということから、動作様態副詞の用法や程度副詞的用法とは異なるレベルで働き、狭義の修飾限定<sup>11)</sup>とは意味的作用のあり方が異なる。以上のことを考えると、程度副詞の用法は認められるものの、安定的に機能しているということは難しいのではないかと考えられる。

ひとつ明確にしておきたいことは「普通に」はウゴキのサマ、コトガラへの注釈、そして段階的属性の程度と異なる修飾関係を構成するということである。言い換えれば、副詞的成分「普通に」イコール程度副詞ではない<sup>12)</sup>。2節で紹介したテレビ番組において「あの子、フツーにかawaiiよね」「フツーにこれ食べたくない?」といった街の声があったことが紹介されているが、前者と後者では修飾関係が異なる。前者は「かawaii」に対する程度修飾であり、後者は「これ(が)食べた<sup>13)</sup>」という命題・コトガラに対する注釈(「これが食べた<sup>13)</sup>」ということはあるふれたことである)である。本稿の論点は「普通にかawaii」が「かawaii」よりもかawaiiと解釈されるか、そうであるとすればなぜそのように解釈されるか、であるから、注釈副詞としての用法については考察の射程からは外れることになる。3.2節で述べたように、命題・コトガラがどれくらい[普通]なのかというのは段階的属性レベルの問題ではなく、いわゆる判断のモダリティの領域に属する問題だからである。

<sup>9)</sup> 井島(2008)はホド句が広義の計量機能を持つものとする井本の議論に対して、ホド句が直接、動詞句や形容詞句を修飾しているようにみえるが、実際には非顕在的な情態概念が潜在しており、それを修飾している狭義の程度副詞と考えてよいという議論の差し戻しを示唆している。これについては捉え方の問題とも思われるが、当面の問題に関して言えば、井島の指摘は「普通に」が高い程度が表しにくいことへの傍証になると思われる。

<sup>10)</sup> なお、ここでのホド句は程度副詞を程度修飾しているのではなく、並列的に述部を修飾している。

<sup>11)</sup> 修飾限定の定義については加藤(2003)、井本(2009)を参照。

<sup>12)</sup> ただし、「普通に」がこのような多義的な修飾関係を構成することの背景に潜在する概念的意味については検討する余地があるが、これについては今後の課題としたい。

<sup>13)</sup> 「食べたくない?」は「食べた<sup>13)</sup>」の同意確認要求の疑問文と考えておく。議論の骨子に影響はない。

## 3.4. 文脈感性について：「全然」との並行性

次に「普通に」の用法を論じるうえでの重要な論点について述べる。それは「普通に」が一種の逆接的な文脈を前提として生起するということである。これはアンケート調査の予備調査のインフォーマントからのコメントにも複数みられた<sup>14)</sup>。次の例を見られたい。

- (38)a. 学食のラーメン、まずいって聞いていたけど、普通においしかった。  
 b. ??学食のラーメン、おいしいって聞いていたけど、普通においしかった。  
 (38)a. 泉さんのカレー、ダサイって聞いていたけど、普通にかっこよかった。  
 b. ??泉さんのカレー、かっこいいって聞いていたけど、普通にかっこよかった。

(38) (39) の各 a 文は、[おいしさ] [かっこよさ] の無標の標準値を否定する（程度が標準値に至っていない）「学食のラーメンはまずい/泉さんのカレーはダサイ」という文脈が導入されたうえでの「普通においしい/かわいい」である。これを「標準程度否定文脈」と呼ぼう。一方、各 b 文は「学食のラーメンはおいしい/泉さんのカレーはかっこいい」という無標の標準値を文脈に受け入れたうえでの「普通においしい/かわいい」である。これを「標準程度肯定文脈」と呼ぼう。なお、「学食のラーメン、すごくおいしいって聞いていたけど」は標準程度否定文脈ではない。段階的属性のスケールには正負の方向性があり、正負どちらにしてもスケール上の高い程度値は無標の標準値を前提としているからである<sup>15)</sup>。

アンケート調査の詳細は次節で述べるが、筆者の内省では (38) a/b, (39) a/b の間の文法的許容度には差があり、標準程度否定文脈を受けた (38) (39) の a 文は文法的だが、標準程度肯定文脈を受けた同 b 文は文法的許容度が低い（「かなり不自然」）。つまり、「普通に」の文法的な運用にはある文脈的条件—標準程度否定文脈—が必要であると考えられる。

この文脈的な条件に関連して想起されるのは、肯定形式と共起する「全然」である。一時期、「全然」が肯定形と共起するのは文法的規範から逸脱しているという意見が優勢であったが、現在では、この用法は必ずしも誤用ではなく、「全然 + 肯定形式」は文脈に導入された内容を否定して応答する「いや、そうではなく」のような意味を表すものであるという解釈が定説となっている（小林 2004, 野田 2000 参照）<sup>16)</sup>。

- (40)a. 学食のラーメン、まずいと思ってたけど、全然おいしい。

<sup>14)</sup> その他、実践女子大学福嶋健伸氏 (p.c) から同様の指摘をいただいた。

<sup>15)</sup> この現象に関しては、「明治期の小説などでは『全然 + 肯定形式』は一般的に用いられており、そもそも誤りではない」という指摘があるが、これはやや論点がずれている。すなわち、こうした明治期の用法は「全く、完全に」という意味の高い程度（あるいは極点修飾）を表す程度副詞的用法であるのに対して、現代の新しい用法はそのような意味では用いられていない。むしろ、相手の問いや前提に対して否定的に応答することが中心的な機能であると考えられる。

<sup>16)</sup> 段階的属性の正負の定義については Hay et al. (1999) などを参照。

- b. ?? 学食のラーメン，噂通り，全然おいしい。
- (41)a. 学食のラーメン，全然おいしいですね。
- b. ?? ところで，学食のラーメン，全然おいしいですか？

「全然」は肯定的応答の文脈（(40)）や、前提が提示されていない文脈（(41)）では不自然になる。このような、「全然」や「普通に」に認められる、語句の文法的使用のための構成要件として特定の文脈的前提を要求することを「文脈感性」と呼ぶことにする。程度副詞が叙述内容的側面（叙述内容内部の意味）を修飾限定するのか、叙法的側面（叙述内容に対する外部からの判断や叙述態度）を表わすのかという問題は古典的問題として長らく議論されてきた（工藤 1983, 2000 参照）。本稿筆者には、これは段階的属性の程度の決定が文脈的要因に依存していることに還元される問題だと思われるが、「全然」やこの「普通に」の文脈感性という性質はその古典的問題が表出した現象といえる。

次節では、上記にみた文脈感性および語彙の意味としての「普通」についてアンケート調査の結果を報告する。

#### 4. アンケート調査

本稿の論点を再掲すると、(1)「普通に」に（高い）程度を表す用法があるか、(2) それは「普通」の語彙の変化によるものかということであった。この論点についてアンケートを行い、その文法性・程度性について調査した。調査項目は次の通りである。

##### I. 副詞的成分と述部の程度性

- ① 学食のラーメン，普通においしいよ。
- ② 学食のラーメンのおいしさは普通だ。
- ③ 松川君のカノジョ，普通にかわいいよ。
- ④ 松川君のカノジョのかわいさは普通だ。

##### II. 標準程度否定文脈と標準程度肯定文脈の文法性

- ① 学食のラーメン，まずいって聞いていたけど，普通においしかった。
- ② 学食のラーメン，おいしいって聞いていたけど，普通においしかった。
- ③ 泉さんのカレ，ダサイって聞いていたけど，普通にかっこよかった。
- ④ 泉さんのカレ，かっこいいって聞いていたけど，普通にかっこよかった。<sup>17)</sup>

<sup>17)</sup> この調査について「おいしいけど，おいしい」のような逆接形式による意味的矛盾が文法性判断に影響している可能性がある。ただし、本稿の予備調査（サンプル数 12）では次の文を使用して同様の結果を得ている（IBM® SPSS® statistics (version19) による平均値（(i) : 3.53, (ii) : 2.66）の差の検定を行ったところ、t 検定 5% 水準で有意差が認められた（ $t(12) = 3.458, p < .05$ ）。

(i) 学食のラーメン，まずいと思っていたけど，普通においしいよ。  
(ii) 学食のラーメンは，噂どおり，普通においしいよ。

I-①/③は副詞的成分「普通に」、I-②/④は述部「普通だ」が現れた文<sup>18)</sup>で、両者の程度値を5段階〔極大・高・±0・低・極小〕の目盛りを付したスケールを提示)で評価する。これは「普通に」が高い程度を表すと解釈されることについて、それが「普通」の語彙的意味に起因するのか、それとも「普通に」という構文成分に起因するのかを検証するものである。II-①/③は標準程度否定文脈、II-②/④は標準程度肯定文脈に現れた文で、両者の文法性を〔とても自然・まあまあ自然・あまり自然じゃない・全く自然じゃない〕の4件法で評価する。これは3.4節で指摘したように、「普通に」に見られる文脈敏感性を検証するものである。

このような調査項目について、福島大学平成22年度開講科目「日本語の構造」の受講生53名(全員日本語母語話者、2・3年次生)をインフォーマントとして調査を行った。その結果、各項目の回答結果の平均値として次の値が得られた。

表1 「普通に／普通だ」程度値(平均値)

	平均値
普通においしい (I-①)	3.79
普通にかわいい (I-③)	3.75
おいしさは普通だ (I-②)	2.89
かわいさは普通だ (I-④)	2.85

表2 文脈敏感性の文法性(平均値)

	平均値
標準程度否定文脈 (II-①)	3.47
標準程度否定文脈 (II-③)	3.47
標準程度肯定文脈 (II-②)	1.66
標準程度肯定文脈 (II-④)	1.66

表3 「普通に／普通だ」平均値(差の検定)

	t 値	有意確率
「普通にかわいい／かわいさは普通だ」(I-①/②)	16.281	.000
「普通においしい／おいしさは普通だ」(I-③/④)	13.433	.000

表4 文脈敏感性の文法性(差の検定)

	t 値	有意確率
標準程度否定文脈／肯定文脈 (II-①/②)	16.281	.000
標準程度否定文脈／肯定文脈 (II-③/④)	16.780	.000

副詞的成分「普通に」と述部の「普通だ」の程度値の差の検討を行うために IBM® SPSS® statistics (version19) を用いて t 検定を行ったところ、「普通に」と「普通だ」の文法性判断において、

よって、標準程度肯定文脈のほうが標準程度否定文脈よりも文法性が低いことがわかる。調査項目の精度向上とより大きなサンプルでの調査は今後の改善課題だが、ひとまず本稿が仮定する文脈的要件は裏づけられているものと考えておく。なお、ここでの「けど」を話題導入用法と考えればここで述べた問題は解消される。実際、「おいしいって聞いていたけど、すごくおいしいよ」などは問題なく成立する。

<sup>18)</sup> 「おいしさ・かわいさ」などは「味・容貌」などのような関数的語彙に言い換えることができる。使用頻度としては「学食のラーメンの味は普通だ」のほうが自然であると思われるが、今回は表現を変更することの影響を考慮し、言い換えは行わなかった。

5%水準で有意差があった (I-①/②:  $t(52)=16.281, p<.05$ , I-③/④:  $t(52)=13.433, p<.05$ )。同様に「普通に」が現れる文脈として標準程度否定文脈と標準程度肯定文脈の文法性の差の検討を行うためにt検定を行ったところ、5%水準で有意差があった (II-①/②:  $t(52)=16.281, p<.05$ , II-③/④:  $t(52)=16.780, p<.05$ )。

以上の調査結果から、次のことがいえる。

(42) 述部用法「普通だ」が表す程度は副詞的成分「普通に」ほど高くない。

(43) 「普通に」の現れる環境としては標準程度否定文脈のほうが標準程度肯定文脈より文法的許容度が高い。

調査結果からは述部用法の「普通だ」が高い程度を表さないことが見て取れる。これは「普通に」が高い程度を表すという解釈は「普通」の語彙の意味およびその変化によるものではないということを示している。「若者の間では『普通』の価値観が上昇しているために『普通に』が高い程度を表すのだ」という分析は、少なくとも文法的側面からみれば説得的ではない。もちろん、語彙の意味・用法が社会状況の変化などの影響をうけて変化することは言語の本質的特徴であり、「普通であること」の社会的価値観が変化してきていることも考えられる。しかし、本稿の調査が明らかにしていることは、そうした社会的要因が「普通」の語彙の意味を変化させたと考えられることは現時点ではできないこと、そして仮に語彙の意味の変化があったとしても、「普通に」の用法を直接説明するものではないということである。むしろ、高い程度を表すと解釈される用法には標準程度否定文脈が導入されていること、副詞的修飾関係を構成する必要があることに注目する必要がある。

## 5. 考察：標準程度否定文脈と [普通]

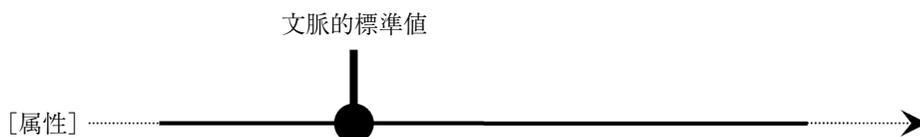
程度副詞として機能する場合、「普通に」は [普通] という値を定める。ここで問題になっているのは、その [普通] が段階的属性のスケールのどの位置に当たるのかということ、あるいは「普通」とは何かということである。

3.3節でも簡単にふれたが、形容詞など段階的属性を持つ言語表現では、成立に必要な程度を満たさなければその属性が実現しない (井本 2008b 参照)。裏を返せば、ある段階的属性を持つ形容詞が意味的に成立しているときは無標の初期状態として、その標準値をみたしていることを含意する。そして、程度修飾とは、スケールにおけるその標準値を「更新する」操作であると考えられることができる。動作様態などいわゆる情態修飾関係と異なるのは、情態修飾関係が意味範疇の要素として含意されるひとつの意味概念にその範疇を限定する (外延を狭める) ことであるのに対して、程度修飾はすでに一点の標準値として定められている程度値を別の値に変えるということである。

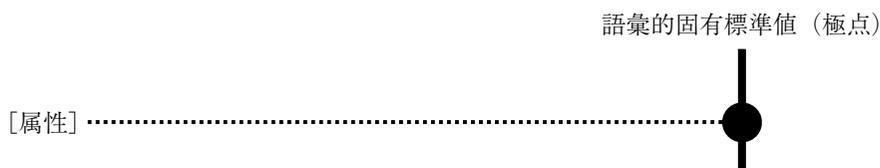
さて、段階的属性をめぐって、近年盛んに議論されているのが「スケール構造 (scale structure)」を用いた形容詞・形容詞派生動詞の分析である (Hay et al. 1999, Wechsler 2005, Kennedy and McNally 2008, 岩本 2008 など)。この分野の推進力となったのが、段階的属性のスケール構造を区別する2種類の標準値の理解である。

スケール構造は標準値が文脈相対的で、スケールの固有の極点を持たない「開放スケール (open scale)」と語彙的に固有の極点を持つ閉鎖スケール (closed scale) に大別される<sup>19)</sup>。図示すると次の (44) (45) のようになる。

- (44) 開放スケールの標準値：文脈上の標準値に至ることで属性が実現する



- (45) 閉鎖スケールの標準値：極点に至ることで属性が実現する



開放スケールを持つ段階的属性が実現するのは文脈的標準値の程度を持ったときである。たとえば「映画の製作費で 5 億円は安い」において、5 億円を安いと捉えることができるのは「安い」の標準値が文脈依存であり、「安い」が開放スケールを持つ形容詞だからである。言い換えれば、5 億円という金額が安いか安くないかは文脈によって変わりうる。一方、閉鎖スケールを持つ語が実現するのは語彙的標準値 (極点) の程度を持ったときである。たとえば「正方形と楕円の形は等しい」は成り立たない。「等しい」の標準値は [等しい] のスケールの極点一点であり、それ以外の中間点では「等しい」は成立しない<sup>20)</sup>。正方形と楕円が等しいか等しくないかは文脈による、ということはない。この標準値は語彙的に固有なのである。

このような標準値の性質の違いに基づくスケール構造の違いは程度副詞による程度修飾の可否として現れる。

- (46) very {tall/fast/expensive/\*empty/\*awake/\*full}  
 (47) completely {\*tall/\*fast/\*expensive/empty/awake/full}  
 (48) だいぶ {おいしい/かわいい/安い/\*等しい/\*四角い/\*空っぽだ}  
 (49) ほぼ {\*おいしい/\*かわいい/安い/等しい/四角い/空っぽだ}

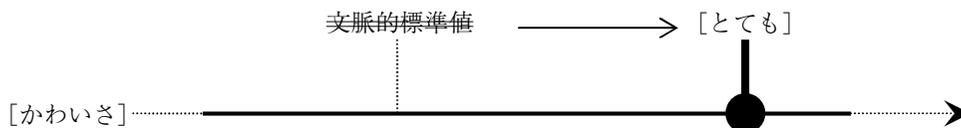
<sup>19)</sup> スケール構造は開放/閉鎖のほか、極点の最大/最小などからさらに下位分類があるがここではこれ以上立ち入らない。Wechsler (2005) 参照。

<sup>20)</sup> 「ほぼ等しい」のような極点を修飾する程度副詞については工藤 (1983)、北原 (2009) を参照。また日本語の形容詞は一部の例外を除いてほとんどが開放スケールの段階的属性を持つ (井本 2008a, 北原 2009)。

上例に見られるように、段階的属性を持つ語が開放/閉鎖のどちらのスケールを持つかで程度修飾の可否が分かれる(佐野 1998, Tsujimura 2001, 井本 2008a, 北原 2009)。英語の例では very は開放スケールの文脈的標準値を程度修飾することができるが completely はできない。Completely は極点に至っていることを示す副詞なので極点を持たない開放スケールとは整合しないのである。日本語の場合も同様で、固有の標準値の近似的程度を表す「ほぼ」は開放スケールとは共起できない。

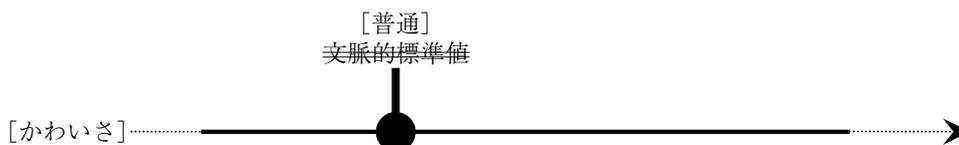
このようなスケール構造において、程度副詞はスケール上の標準値を更新し、程度副詞が表す程度値を指し示す。たとえば「とても」による程度修飾「とてもかわいい」では次のようなスケール上の程度値の更新が行われると理解される。

- (50) とてもかわいい<sup>21)</sup>: 程度値が無標の標準値から有標の [とても] の値に更新される



しかし、程度修飾をこのように考えると、「普通に」が程度修飾する場合には「程度値の更新」はないということになる。なぜなら、[普通] とは無標の標準値に他ならないからである。

- (51) 普通にかわいい: 程度修飾しても程度値が更新されない



情態概念の修飾限定であれ、程度修飾であれ、副詞的成分はその語彙的意味によって被修飾成分を修飾する。仮に述部の程度と程度副詞成分の語彙的意味が等しければ、意味的な更新はなく、意味論的に不自然な、空虚な操作 (vacuous operation) ということになる<sup>22)</sup>。

ここで、3.4 節・4 節でみた標準程度否定文脈を思い出そう。程度副詞の用法の「普通に」は無標の標準値がキャンセルされた文脈で機能する。例を再掲する。

<sup>21)</sup> 「やや」のような低程度から「きわめて」のような非常の程度まで、正方向の程度値にも大きな幅があるが、これらのスケール上の分布を考えると、文脈的標準値は Kearns (2007) が提案するような目標標準値 (standard telos) のゾーンの下限であると理解するのが妥当かもしれない。

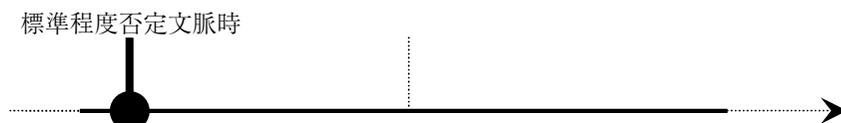
<sup>22)</sup> ただし、「どれくらいおいしかったの?」「普通においしかったよ」のような程度値が焦点になっている場合など、同じ値を有標的に示す合理的理由がある場合は有標的表示の動機は当然ありうる。このとき標準程度否定文脈の必要はない。

(52) 泉さんのカレー，ダサイって聞いていたけど，普通にかっこよかった。(=(38))

(53) 学食のラーメン，まずいって聞いていたけど，普通においしかった。(=(39))

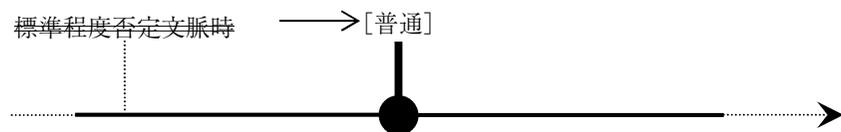
上例の文脈では [かっこいい・おいしい] の各スケールにおける文脈的標準値は「ダサイ・まずい」によって負の方向に動いている。つまり文脈的に程度値が低くなっている。

(54) 学食のラーメン，まずいって聞いていたけど，：標準程度否定文脈



この文脈的状况において「普通に」が程度修飾すると程度値は [普通] に更新される。

(55) 学食のラーメン，まずいって聞いてたけど，普通においしかった



これは (50) において文脈的標準値が「とても」によって更新（程度修飾）された状況と相似的な状況である。違うのは，(55) では更新される標準値が文脈的に低く定められている点である。つまり，「普通に」がしていることは「当該文脈において低く下げられた文脈的標準値を [普通] に更新する」ことであるといえる。高い程度を表すという解釈は見かけ上であって，スケール上の正の方向に更新することで「とても」と相似的な—より高い程度を表す—関係が成立しているのである。

なお，開放スケールの程度が文脈的標準値によって定められるのであれば，「普通」も当該文脈の標準値によって定まるのではないかという疑問がありうる。しかし，修飾対象となる開放スケールの標準値が当該文脈によって定められるということと，3.1 節でみた動作様態副詞の用法の「普通に」が表すサマが文脈や社会通念上の「ありふれていること」であることとは別である。程度副詞の用法の「普通に」が表すのはスケール上に分布する程度値を表す程度副詞群と同様，「目盛り」としてのスケールの中間点 ( $\pm 0$ ) の [普通] である<sup>23)</sup>。だからこそ，標準程度否定文脈において「普

<sup>23)</sup> ここでの「普通に」の語彙的意味が「『普通』の持つ意味・社会的価値観が変わってきた」という第 1 節で紹介した論点へと帰結されるのではないかという反論も想定されるが，本稿で述べてきたように，それでは述語用法でそのような意味が生じないこと，標準程度否定文脈が要求されることの説明がつかない。もちろん「人が何を『普通』だと考えるか」は時代や社会の影響を受けて変化していく可能性があることは否定しない。

通に」は程度値を標準値に「更新する」のである。

このように、「普通に」が高い程度を表すと解釈される用法は、標準程度否定文脈によって述部のサマの程度値が無標の標準値よりも低く設定されていることで「普通に」が表す程度が相対的に正方向に更新されているためであると考えられる。これが標準程度否定文脈を必要とする理由である。また、副詞的成分の「普通に」にのみこのような現象が見られて述語用法の「普通だ」にこのような解釈が生じないのは、この解釈が当該文脈における修飾対象の標準値が修飾成分の持つ程度によって更新されるという構文関係によって生じるものであるからである。標準程度否定文脈において副詞的成分として程度修飾する。これが「普通に」が高い程度を表すようにみえるメカニズムであり、「普通」の語彙の意味が変わったからではなく、また社会的価値観の変化が反映されているからでもないのである。

## 6. おわりに：残された課題と論点

本稿の議論をまとめると次のようになる。

- (56) 「普通に」が高い程度を表すとされる現象は「普通」の語彙の意味の変化や普通であることに対する社会的価値観の変化によるものではない。
- (57) 「普通」が高い程度を表すと解釈されるのは：
  - a. 標準程度否定文脈が前提として導入されており、
  - b. 「普通に」が程度副詞として機能することが必要である。この2点によって、文脈的標準値が無標の標準値よりも相対的に低く定められており、かつ、「普通に」が表す「普通」が相対的に程度の高い程度値を指し示しているというスケールの関係が設定される。

本稿の考察が一定の結論にたどり着いたとはいえ、この結論からは多くの課題あるいは次に向かうべき論点が浮かび上がってくる。本稿では件の「普通に」を程度副詞用法と位置づけたが、要件としての標準程度否定文脈によって、ある種の下位叙法を表わす叙法副詞との関連を窺わせている。それは3.2節でふれた「意外と」のようなものである。

- (58) 学食のラーメン、まずいと思っていたけど、意外とおいしいね。
- (59) 泉君のカレシ、ダサイと思っていたけど、意外とかっこいいね。

ここでの「意外と」は基本叙法のうちの「予期・予想」とでもいうような下位カテゴリーの叙法を表わす。3.2節で挙げた「珍しく・あいにく」などもこれに相当する。これは叙述内容に対して注釈を加えるような用法で、叙述内容の意味を修飾するとは位置づけられないのであるが、実際、

---

それは言語一般の基本原則であるが、それだけではこの現象は説明できないということである。

(58) (59) で解釈される「おいしい・かっこいい」の程度値は無標の標準値よりも高いのではない。そうであるならば、叙法副詞「意外と」は叙述内容の内部の程度値に干渉していることになる。工藤(2000)は叙法副詞を細かに観察し、述部とともに種々の細かな叙法を担当する副詞群を見渡すなかで「程度副詞の『程度』は単なる<状態量>ではない」としている(：226)。つまり、注釈副詞の程度修飾の側面と程度副詞の注釈的性質とは相互に影響しているということである。では、本稿で論じた「普通に」の程度副詞的用法が直ちに注釈副詞の程度修飾の側面に還元されるべきなのかどうか。標準程度否定文脈というような文脈的状况と「普通にかわいい」の程度的意味を構造的・体系的に記述するためには今のところスケール構造のような段階性に関わる道具立てを採用するしかない。つまり、程度副詞と注釈副詞の相互交渉を丁寧に扱うというアプローチと、スケール構造・段階性を構造化・形式化するというアプローチの間には方法論上の目標の乖離が生じることになる。今後、「普通に」の用法をどのように記述していくかということは、このような叙述内容的側面と叙法的側面の両面性をどのように捉えるかという視座の選択をも迫られるということである。このように、スケール構造理論における段階性の正確な形式化を追求する一方で、その用法・生起環境を詳細に記述する必要性もやはり見過ごすとはできないと考えられる。

その他、多義的にも見える「普通に」の修飾関係についても複数のアプローチがありうる。概念スキーマにもとづく多義的ネットワークに近い見方と、形容詞「ひどい・おそろしい」から「ひどく疲れた・おそろしくかわいい」といった程度副詞が派生したような、一方向的な派生関係として捉える見方である。こうした多義性の位置づけをどのようにするか。「普通にかわいい」は「単なる若者言葉のひとつ」として看過するには惜しい、多くの重要な論点を含む現象である。調査の精度や規模を拡大・改良しつつ、今後さらに考察を進めたい。

## References

- Hay, Jennifer, Christopher Kennedy, and Beth Levin (1999) Scalar structure underlies telicity in “degree achievements.” *Proceeding of SALT IX*.
- 井島正博 (2008) 「クライ・ホド・ナド・ナンカ・ナンテの機能と構造」『日本語学論集』第4号, 東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室
- 井本亮 (2000) 「連用修飾成分「ほど」句の用法について」『日本語科学』8, 国立国語研究所
- 井本亮 (2004) 「誇張表現としてのホド構文」『日本語と日本文学』筑波大学国語国文学会
- 井本亮 (2008a) 「日本語の形容詞派生動詞をめぐって」『言語記述と言語教育の相互活性化のための日本語・中国語・韓国語対照研究』平成16～19年度科研費(基盤(B))研究成果報告書
- 井本亮 (2008b) 「限界点を越える—「Vすぎる」の意味計算と解釈コスト」岩本遠億編著『事象アスペクト論』開拓社
- 井本亮 (2009) 「日本語結果構文における限界と強制」小野尚之編『結果構文のタイポロジー』ひつじ書房
- 岩本遠億編著 (2008) 『事象アスペクト論』開拓社
- Kearns, Kate (2007) Telic senses of deadjectival verbs. *Lingua*, 117.
- 北原博雄 (2009) 「日本語の程度修飾についての意味論的・統語論的研究」平成17年度～19年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書 聖徳大学
- 北原保雄編著 (2004, 2005, 2007) 『問題な日本語』『統弾! 問題な日本語』『問題な日本語その3』大修館書店
- 小林賢次 (2004) 「全然いい」北原保雄編著『問題な日本語』大修館書店
- 工藤浩 (1983) 「程度副詞をめぐって」渡辺実編『副用語の研究』明治書院

- 工藤浩（2000）「副詞的修飾と文の陳述的タイプ」森山卓郎・仁田義雄・工藤浩著『日本語の文法3 モダリティ』岩波書店
- McNally, Louise and Christopher Kennedy (eds.) (2008) *Adjectives and adverbs: Syntax, semantics, and discourse*. Oxford University Press.
- 仁田義雄（2002）『副詞的表現の諸相』くろしお出版
- 野田春美（2000）「『ぜんぜん』と肯定形の共起」『計量国語学』22巻5号，計量国語学会
- 佐野由紀子（1998）「程度副詞と主体状態変化動詞の共起」『日本語科学』3，国立国語研究所
- Tsujimura, Natsuko (2001) Degree words and scale structure in Japanese. *Lingua*, 13.
- Wechsler, Stephan (2005) Resultatives under the event-argument homomorphism model of telicity. *The syntax of aspect — Deriving thematic and aspectual interpretation*, (eds.) Erteschik-Shir, Nomi and Tova Rapoport, Oxford University Press.